

## 27 ベレッティーニ解剖図譜における

### 自律神経系(第二報)

レジス・オルリー、○本宮かをる<sup>1)</sup>

一七世紀初頭、イタリアのバロック期の著名な画家の一人であるピエトロ・ベレッティーニ(Pietro Berritini, 1596-1669)は、装飾的な27枚の解剖図譜を描き、現在グラスゴー大学図書館にその原画が遺っている。

これらの解剖図はルカ・チャンベルラーモ(Luca Ciamberlano)が彫版して、一七四一年にカエターノ・ペトリオリ(Cajetano Petrioli)一七八八年にフランシスコ・ペトラーグリヤ(Franciscus Petraglia)によって出版された。

アルベルト・ハラー(Albert von Haller)は、著書「*Bibliotheca anatomica*」(1774-1777)のなかでこの解剖図はフランスの外科医ニコラス・ラルシェ(Nicolas Larchee)の依頼で描かれたとしたが、今日我々はその名

を他で見いだせず、この人物についてそれ以上の情報は得られない。

この解剖図譜を挿し絵とするはずであった文章は発見されていないので、当時の解剖学的知見は、図譜から読みとるしかない。

そこでこの研究の目的は、ベレッティーニの解剖図にみられる自律神経系について解剖学的に詳説し、前後の他の解剖学者の解説と比較しようというものである。

過去にさかのぼって文献を調べると、

一三四年のグイド・ヴィジェヴァーノ(Guido da Vigevano)と一四七八年のモンディーノ・ルッツィ(Mondino dei Luzzi)の書にはとくに自律神経系について記されていない。

一五〇二年のガブリエル・ツェルビ(Gabriele Zerbi)の書では、自律神経系が第五脳神経に属していることとされている。

一五四五年のシャルル・エスティエンヌ(Charles Estienne)の著書では、おおまかな交感神経幹と交通枝が

説明された。

一五五二年に描かれ、一七一四年に出版されたエウスタキウス (Bartolomeo Eustachius) の本では、神経の走行の描写はすぐれており、交感神経幹も描写されているが、脳幹からの起こりが正確でない。

そして一六一八年前後にニコラス・ラルシエの発注とされる神経系の解剖図譜が、ベレッティーニという画家によって描かれた。

その後一六六四年のトマス・ウィリス (Thomas Willis) の本では、交感神経幹は肋間神経と呼ばれている。

一六八四年のレイモンド・ビュソン (Raymond Vieussens) の本で、自律神経系の説明が初めて試みられた。

一七三二年にジャック・B・ウィンスロウ (Jacques Benigne Winslow) が、当時としてはもっとも正確な自律神経系の記述を著書の中にあらわした。

このように実際のところ自律神経系の発見は、ベレッティーニの解剖図の描かれた数十年後のビュソンと百年以上後のウィンスロウらの著名な業績によって始まった

といえる。

十七世紀初頭は、まだ自律神経系に関する知識は充分ではなく、当時の解剖学者たちの間では、交感神経幹は肋間神経と呼ばれており、ほとんどの神経節の結合部は知られていなかった。

ベレッティーニの解剖図譜では、おもにプレート5から14までに自律神経の構造が描写されている。「肋間神経」と呼ばれたもの(現・交感神経幹)が胸部に明確に示されているが、胸部神経節は見逃されている。この時代には描かれたはずの頭蓋副交感神経系の構成要素はどのプレートにも見あたらない。

ベレッティーニの解剖図譜には、多くの交感神経・副根幹神経が緻密に描かれている点で、自律神経系の解剖学的観察が当時としては突出している。と同時にそのほかの細部に、解剖学的所見にも当時の知識にも適合しない描写もあり、背後の著者である神経解剖学者の鑑定を困難にしている。

(1) ケベック州立大学トロワリヴィエール校

(2) 東京大学教養学部総合文化研究科